

WEP

ウェブ俳句通信

VOL. 57

俳句通信

特別作品25句 ● 山崎千枝子「郭公の森」

特集 ● 〈死を前にして詠んだ句〉を読む

松本陽平・柳下惇夫 北光星・源 鬼彦 藤田あけ鳥・名和未知男
 田中裕明・対中いずみ 藤田湘子・大石香代子
 福田甲子雄・保坂敏子 前山松花・堀口俊一
 肥田瑩勝美・松本津木雄 林 徹・田島和生
 戸田和子・荒木 甫 白井眞貫・米山光郎
 川崎展宏・木内 徹

新企画 ● 同時代作家を読む

MATURE——好井由江論 大庭紫逢
 好井由江作品30句

【実力作家競詠 20 句】

上田日差し「風の応へ」
 稲畑廣太郎「諏訪湖」
 森賀まり「祇園会」

作品16句 ● 田中水桜・倉橋羊村・鍵和田
 柚子・友岡子郷・大嶽青児・落合水尾・寺
 井谷子・大岳水一路・市村究一郎・宮本径
 考・小檜山繁子・大畑善昭・石井保・酒井
 弘司・小路智壽子・後藤立夫・柴田佐知子・
 井越芳子 ほか

● 好評エッセイ ●

視野遠近「龍太の“山”」(三)廣瀬直人
 夢「遠き日をふり返り」倉田絃文
 伝統の探求「客観・主観・月並」筑紫磐井
 戦後の俳人たち「稲垣きくの」松岡ひでたか
 虚子の肖像「虚子恋」坊城俊樹
 誓子の素粒子「不即不離」品川鈴子
 一句一想「方南町から」小島千架子



特集

へ死を前にして詠んだ句を讀む

蕪村のへ白梅の明くる夜ばかりとなりけりへ、子規のへ糸瓜咲いて痰の
つまりし仏かなへを初めとする糸瓜3句、相馬遷子のへ冬麗の微塵となり
て去らんとすへなど、俳人が死を前にして詠みのこした句はたくさんあり
ます。親近した俳人のそのような句をあとに残った自分がどのように受
けとめ、読んだかについて12人の俳人に書いていただきました。



イラスト 田中丸葉子

案山子^{かかし}

夕空のなごみわたれる案山子かな

富安風生

倒れたる案山子の顔の上に天

西東三鬼

たそがれの顔の真白き案山子かな

三橋鷹女

わたしが子供のころ、稲が穂る季節が近づくとき田んぼに案山子が立った。つきはぎだらけのボロの着物を着、藁の上に白い布を丸く覆った頭部の顔にはへらのへのもへじ、そして破れた麦藁帽子をかぶって一本足で立っている。そんな質素な案山子がわたしは好きだった。

職人の家であつたわが家では職人たちが酒盛りをした。秋の夜の酒盛りになると、ひとりの職人がよく案山子芸を披露したものだ。別の足を一本足にからけて立ち、くわえ煙草を吸い切るまでただ立っているのだが、酔っているものだから、途中からゆらりゆらりし始める。それでも倒れずに最後まで煙草を吸い切ったものだ。その職人は、酔って国道を歩いていて、車に轢かれ、あつけなく死んだ。

いま、わたしの家のまわりから田んぼは姿を消し、田んぼはマンションや倉庫にかわっている。わたしが、どこか懐かしい案山子に出合うのは、地方に釣りに出かけるときくらいである。

大崎紀夫

伝統の探求

4

客観・主観・月並

筑紫磐井

2回にわたり平明と難解を眺めてきた。考えてみると、俳句を論じるに当たって時代を超えて「平明」を論じた評論はあまり思い出せない。まして、個別個別の作家や運動を超えて通史的に晦渋・難解を論じた評論を見た記憶もない。その意味では、この拙い論も多少今後の議論の材料になりえると思う。

現在、平明も難解も俳句を論じる際のキーワードになっていないのは、実はこれが「伝統以前」の、前提となる議論だからである。伝統論そのものは、現在、季語や定型や切字の技術的な問題に専門分化してしまっている。従って伝統論そのものとしては平明も難解も触れられずにいるのだが、伝統の根本に遡る時、これを抜きにして考えるわけには行かない。いや、伝統を考える時いつの間にか、平明と難解が姿を変えた問題に逢着していることとなるのである。今回は姿を変えた平明と難解について考えてみることにしよう。それは客観と主観である。

●碧梧桐の客観句

繰り返しになるが、伝統の探究の前史は子規・碧梧桐の

写生の主張に始まる。子規の提唱した写生を純粋に推し進めた碧梧桐の「客観の写生」が、すべての議論の発端となったのである。碧梧桐は言う。

へ近頃客観の句には飽きたとか、写生趣味も陳腐になった、などと愚説を吐く人が往々ある。これらは客観趣味の句を一時の流行のように心得ている謬見である。いまさら説明を待つまでもなく、理想（空想）の句は客観研究の余に胚胎するものであつて、大理想（空想）の句は大客観研究の後でなければ醇成せぬというくらい何人も熟知しているはずである。言わば客観研究は句作の根本で、写生ということとは終始句作とは離るべからざる関係を持つてゐる。客観の句に飽きたなどといふ人が果たして客観句の極致を解しているか、また理想（空想）の句の極致をわきまえているか、甚だいぶかしいことである。

もし今日の客観句・写生趣味の句に飽き足らぬのであれば、今後益々客観句・写生趣味の句を奨励すべきである。理想（空想）の句の鼓吹を必要とする所以を見るに苦しむ。重ねていうが、大理想（空想）、高理想（空想）の作は、熱